

嗚呼悲しい哉

至仁至聖にましまし、明治天皇陛下には御不豫以來億兆の
默禱も國手の攻療も其の驗なく明治四十五年七月三十日午前
零時四十三分を以て溘焉として崩御あらせ給へり闔國の蒼生
縞素慟哭して罔然措く所を知らず
敬みて惟ふに陛下天縱維れ聖維れ神加ふるに勵精儉素躬ら
儀範を垂れて衆庶を率ゐさせ給ひ以て千古に冠絶する君徳を
全成せさせ給ひ在位四十有五年の久しき之を内にしては夙に
維新の鴻謨を開き千古不磨の大憲を煥發して國本を鞏固にし

庶績維れ熙まりて萬民堵に安んじ之を外にしては國交を親善
にして賓主の睦誼を敦くし或は日清日俄の兩役に克捷し或は
韓國の併合を遂げて版圖を益擴張し炎風朔雪到る處旭旗の翩
翻たるを見るに到り國光四表に被り皇威八紘に振ふ巍々乎た
る其の成功煥乎たる其の文章於戲亦盛んなる哉
悲秋漸く闌けて泣露轉た繁し年々歳々菊花をかざして聖壽の
無窮を祝し奉りし賜酺の盛典も想へば一場の夢ありけりあは
れ十旬の前には千代田の城の宮闕近く今上陛下と仰ぎ奉り
しを鼎湖龍去りて攀髯に由なく烏號長へに億兆の恨を繋ぎて

今や桃山の御陵の影は遠く寥廓を隔て、龍顏再び拜するに難
し大哀しい哉 八月二十日

明治の御代は逝きて元は大正と改まりぬ成典に恪遵して
今上天皇陛下は大統を踐ませ給ひ朝見の御式に詔を下して畏
くも先帝の偉業を繼承して之れを恢宏せんことを宣らせ給
ひ有司臣民が和衷協同して大業を翼贊し奉らむことを希はせ
給ふ悦ばしき哉皇基の牢乎として磐石よりも安きことや懌ば
しき哉民心の翕然として歸趨するところあるや
仰けば今上陛下至孝至慈允に文允に武諒闇の御涙かわきも

果てぬに宵衣旰食一日萬幾を親裁せさせ給ひ終を慎ませ給ひ
 ては親しく大喪儀を行ひ如在の禮を盡して大孝を申へさせ給
 ふ嗚呼 先帝陛下の御遺徳に感佩して蹇々匪躬盡忠報國に餘
 念なき我等臣民は今や 今上陛下が至盛至大の乾徳を側聞し
 て争てか感憤興起せざらむ庶幾くは各自その分を守り夙夜恪
 勤奉公の至誠を竭し以て 先帝に報じて 今上に忠なる所以
 の道を完うせむ哉

大正元年十一月二十日

東京女子高等師範學校學術談話會文科部

文科學術談話會々誌 第四號

目次

講

演

- 滑稽美に就いての談話大要……………文學博士 芳賀 矢一……………一
- 明治年間に於ける女子訓の變遷……………文學博士 吉田 熊次……………九
- 道徳的智識と道徳行爲との關係……………文科四年 福田 ふめ……………一七
- 靜寛院宮親子内親王の御事蹟……………文科四年 杉山 はな……………三〇

研

究

- シヨツベンハウエル、ラスキン……………(承前)……………千葉 安良……………五一
- の女子問題に就ての所感……………

文

苑

- (國 文)
- 悲しき大みゆき……………文科二年 關 みさを……………六二
- 慈 善……………文科一年 中島 ヒサ……………六三
- 鏡……………文科一年 安 吉 ます……………六五